

平成 25 年度学内教育 GP プログラム事業経費 成果報告書

| | |
|----------------|--|
| 区 分 | 萌芽型 |
| 事業名称 | 「グローバル女性リーダー育成」に必要な学位プログラムの構築 |
| 取組代表者名 担当者名 | <p>* 事業担当者は全員記入してください。</p> <p>菅本晶夫（自然・応用科学系長） 河村哲也（国際・研究機構長） 伊藤貴之（大学院人間文化創成科学研究科教授） 小林功佳（大学院人間文化創成科学研究科教授） 由良 敬（大学院人間文化創成科学研究科教授） 村山真理（リーダーシップ養成センター准教授）</p> |

1. 成果の概要

実施した事業の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、当初設定した目的・目標に照らし、3 ページ以内で、できるだけ分かりやすく記述すること。必要に応じ、図表を用いても構いません。

本事業は、「博士課程教育リーディングプログラム」の採択を目指して、計画されたものである。幸い本事業を計画通りに遂行することが出来たので、その結果平成 23 年 10 月には「博士課程教育リーディングプログラム」に採択された。これが「みかかずば」の精神に基づきイノベーションを創出し続ける理工系グローバルリーダーの育成プログラムである。

従って事業の目的は達成された。

なお、上記の取組担当者は発足当初のものであり、事業開始後、半田智久先生、古川はづき先生、太田裕治先生、郡宏先生に担当者として加わって頂いた。加えて教務チームの上山晶弘さん、高荷敏之さん、長澤豊さん、ならびにこの経費で雇用した袴田則子さん及び桑名杏奈さんの全面協力を基に、「博士課程教育リーディングプログラム」の採択を目指した事業である。

事業目的として、平成 21 年度に申請したが採択されなかった「博士課程教育リーディングプログラム」の反省を基に、次の 4 つの課題を解決するとした。即ち

課題 1) 現在活躍している本学の卒業生・修了生を正確に把握する：

そのために利用できる OG データベース (OGDB) は、昨年度採択された「ポストドクター・キャリア開発事業」の経費を用いて、構築が完了している。この DB を駆使して、卒業生・修了生の実態を正確に把握する。

課題 2) 国内外の産官学連携機関の構築：

これまでの実績を基に、国内外の産官学連携機関を選別し、本学に協力するプログラム担当者を決める。そのためには国内外の連携機関との間で協定等を結んで、院生が活発にローテーションできるようにしなければならない。同時に本学の教員と連携機関の研究者も、活発に相互に研究

交流をしなければならない。

課題3) 「21世紀型博士課程リベラルアーツ」と「博士課程複数プログラム制」の具体化。現在リーダーシップ養成教育研究センターとポストドクター・キャリア開発事業が連携し、三井物産の協力を得て、「グローバル女性リーダー特論(基礎編)」をパイロット的に実施中である。この授業は「博士課程教育リーディングプログラム」の試行実験と考えている。

課題4) QE 制度の構築:

本学に適したQEの構築は急務である。

事業開始後に最も重視したのは関係者へのヒアリングと調査である。即ち、

○実施項目1) 博士課程教育リーディングプログラム採択大学の調査

先ず大阪大学と京都大学を訪問し、大阪大学が実施している3つのリーディングプログラムの立案担当者から、直接プログラムの立案方法を学ぶと共に実施の現状を学んだ。京都大学では文科省が意図する本プログラムの趣旨が何であるかを学んだ。

○実施項目2) 産業界が求めているリーダー像に関する会社経営者からのヒアリング

数々の会社経営者にヒアリングを行って、「産業界が求めているリーダー像」を明らかにした。又産業界において即戦力となる人材を育成するためにはどうするかに関しても、詳細な調査を行った。ランクセス等海外の企業関係者のヒアリングも行った。

このヒアリングからリーダー像の多様性と、短期間でパラダイムが変化する流動的な現代社会を生き抜くノウハウを身につける方法を学んだ。そこで知り合った経営者をプログラム担当者に委嘱して、リーディングプログラムに申請した。

○実施項目3) 研究機関との連携を目指しての活動

総研大、理研、高エネ研、産総研、物材研等各地の研究機関を訪問して、連携に関する交渉を行い連携協定の締結に動いた。実際理研、高エネルギー加速器研究機構、国立天文台、統計数理研究所との間で連携協定を締結することができた。

上記の実施項目1)～3)を基に個別の課題を解決して行った。即ち

課題1): 現在活躍している本学の卒業生・修了生を正確に把握するに関しては、特に博士後期課程を終了し活躍している本学の修了生に着目し、OGDB および各コース代表を通して修了生の情報を集めて、卒業生・修了生のリストを充実させた。

課題2): 国内外の産官学連携機関の構築に関しては、上記の実施項目3)で実現できた。

課題3): 「21世紀型博士課程リベラルアーツ」と「博士課程複数プログラム制」の具体化に関しては、ヒアリングによって流動的な社会を乗り切るためには基盤的素養としての物理、数学、情報が重要であると分かったので、これらに関する基礎科目を英語で実施することとして、種々の授業科目を立てた。又グローバルリーダーとなるためには人間としての豊かな教養が不可欠であることを学んだので、Philosophy, Ethics等のリベラルアーツ科目を英語で実施することとした。敢えて「博士課程複数プログラム制」という言葉は用いなかったが、主専攻に対して理工学副専攻を立てたので、従来の主専攻による主プログラム(Major)を確保しながら、理工学副専攻において副プログラム(Minor)を実施するというスタンスを築くこととして、この課題を解決した。

課題4) QE 制度の構築に関しては、4種類のQE、即ち initial QE、periodic QE、middle QE、final QE を配して、従来のQE の概念を一変させた。更にこのQE をより具体的に実施するためのポートフォリオを工夫し、チームポートフォリオとした。更に評価にあたってのルーブリック評価システムをウェブ化することにも成功しつつあるので、この4種類のQE とポートフォリオを用いた学修評価システムの構築は、画期的な成果と言えるだろう。

本事業を遂行し、博士課程教育リーディングプログラムの獲得を目指す過程で、PBL を一層深化させることができた。深化させたものを「Project Based Team Study (PBTs)」と名付けたが、異質な人達から構成される一つのチームが課題を設定し、チームで如何にして成果へと導くか(leading するか)という新しい教育方法にチャレンジすることが出来た。このことも大きな成果の一つと考えている。

即ち、特定のプログラムに採択されることを目指して計画した「萌芽的学内教育 GP」ではあったが、6名の当初プログラム担当者を含む総勢15名の異質なメンバーからなるプロジェクトチーム(OLWG、後にOLPJと改名)を作って、喧々諤々と議論を続けた結果、種々の新しい発見をすることができた。グローバル女性リーダーとは何かに関する理解においても進展があった。その結果として、リーディングプログラムの申請要領に書かれた趣旨をはるかに越えることができたと自負するものである。この萌芽的学内GPにおいて、われわれはPBTs を具体的に実践し優れた成果を挙げたということもできるのではないだろうか。

2. 今後、申請を予定している競争的資金

本経費は、外部の競争的資金等を獲得するための準備経費として助成しました。今後、競争的資金の申請を予定している場合は、資金名を記入してください。

新たな競争的資金の獲得を目指す場合には、新規に学内教育GP(萌芽型)に応募する予定である。